



# 第六回 鎌倉文学館こども文学賞 作品集

## 応募総数

小学生の部 180作品

中学生の部 547作品

## 審査委員

三木卓（作家・詩人）

角野栄子（童話作家）

富岡幸一郎（文芸評論家・鎌倉文学館館長）

今の自分を！

角野 栄子

子どもの詩って、なんて魅力的！ 毎年、この文学賞の選考をする度に思います。ぴちぴちと弾けるような言葉の新鮮さに、驚きさえ感じます。

小学生の部の大賞の檜田愛さんの「なみだ」には、心から共感しました。悲しくて泣くのに、涙を流した後は、不思議と気持ちが明るくなります。「なみだがなかったら、ずっとかなしい気持ちだった」。本当にそう。涙ってすごい！ 私もそうとう泣き虫でしたから、よくわかります。一年生の平野藍花さんの「おとうとのおなら」は、涙がでそうなくらい可愛かった。

中学生の部では、松元裕志さんの「無限ループ」が大賞でした。中学三年生らしい作品。言葉が省略されていることで、読む人がそれぞれ、自分に引きつけて読むことができます。「矛盾」という言葉が生きています。私はこの言葉を「自由」と読みました。

小学生、中学生……と、作者の年齢は違っても、どれも「今の自分」が素直に表現されています。それは貴重な経験です。応募作を読むことで、私もさまざまな年齢の「今」を共有できました。

こども文学賞

大賞

小学生の部 大賞 「わたしのなみだ」

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校3年 榎田 愛さん

うっだ

まな

わたしのなみだはすぐ出たがる

そして

すぐ出る

とてもいっぱい出ることもある

少ないときもある

外でなみだを流すとアリスさんのプールになる

なんでなみだが出るのかな？

なみだの水はなんだろう？

なみだは心に雨がふる

わたしはすぐけしこむをなくす

そうするとママがおこる

そんなとき心にかミナリがおちる

そんなときなみだは

いっぱい出てくる

なみだは生きているかもしれない

おちているように見えるけど

わたしの顔にくっついていてかもしれない

なみだはかなしい気持ちを出してくれるかもしれない

だからなみだを出すと

そのあとたのしくなる

なみだのおかげでそのあと

弟をだきしめたくなる

早く大人になりたくなる

海にとびこみたくなる

なみだがなかったら

ずっとかなしい気持だった

ありがとう

中学生の部 大賞 「無限ループ」

明星学園中学校3年 松元 裕志さん

まつもと

ゆうじ

世の中にあるものは

だいたい仮で

そのままにしていることが多い

仮っただけだから、謎もまだある。

謎を残しながらそのまま認めている。

認めたものなんて百年もすればだいたい壊れる。

壊れてでてきた認められたものもまた壊れる。

こんなイメージを自分は認めている。

これが認められなくなるのはすべてがずっと認められたとき。

こんな矛盾があるから仮になる。

繰り返しだ。

小学生の部  
入賞

# 入賞 「ふねをかつたぼく」

聖マリン学院小学校1年 菊田 伶さん

ふねをかつたらなにをする。

うみのうえでまようぼく。

どこどこいくかをかんがえる。

みぎへいく？ ひだりへいく？

それともきた？ それともみなみ？

どちらへいくか、まようぼく。

ふねをこいで、どこどこへ。

アメリカへいく？ ロシアへいく？

フランスへいく？ ドイツへいく？

マレーシアへいく？ どこどこへいく？

どこどこいくか、まようぼく。

ロシアまでふねをこいでつかれたぼく。

ロシアのともだちさがすんだ。

どここのみちかな。

あたまのなかでおもいだす。

このみちあのみちさがしだす。

どこどこにいるのかわかるまよ、まぎのひとどこまでみる。

どこどこかおもいだすまよまようぼく。

ともだちがいてほっとしたぼく。

やっとなえたよ、うれしいな。

まえはおなごまちにいたんだよ。

だけだようじじいしちゃった。



おとうさんのかいしゃのためなんだ。

いまはひとりぼっちなんだ。

かえってふたりであそぼうとおもったけれど、ふねがどこだかわすれちゃった。

どこからきたのかわすれちゃったぼく。

すこしかんがえて、おもいだした。

ひだりへあるいてふねをみつけた。

ふたりでふねにのりこんで、なみをこえてまちについたよ。これをふじたひはおしまい。

つきはなにをかおうかまようぼく。

入賞 「おとうとのおなひ」

蒲郡市立三谷小学校1年 平野<sup>ひらの</sup> 藍花<sup>ろか</sup>さん

おとうとはあかちゃん

まくにちおなひをすむ

かへかへかへかへかへかへかへかへかへかへかへ

うみのなかで さかながあくび

かかかかかかかかかかかかかかかかかかかかか

きょうは りっぱのえんそうかい

ほんと あまがおひらくおと

ほんと はなびがあがるおと

わらっていても ならなくても

ねてるよまかかかかかかかかかかかかかかかかかか

おかあさんは いとおしいおとだとう

わたしも たまにくまひげじ すきなおと

## 入賞 「うめぼし」

蒲郡市立三谷小学校2年 大谷 おおたに 美鈴さん みすず

六月にばあばが青いうめをとってきた  
しおにつけたり  
赤いしそを入れたり  
そしたら  
八月にはびっくり  
大きなぼけつが中がまっ赤になってた  
ふしぎ  
絵具だったら  
赤と青でむらさきになるのに  
わたしもばあばのお手つだい  
大きな竹のざるに  
ていねいに一つずつうめをならべた  
わたしの手もピンクにそまった  
うめをにわにほした  
うめぼしは、ちよつとにが手だけど  
ひさしぶりに食べてみた  
口の中が  
いっぱいすっぱくなった

入賞 「スイカさん」

鎌倉市立第一小学校2年 大塚律おつかりつさん

おいしい、スイカさん。

元気ですか。

わたしは、元気です。

こんど、スイカさんをわって、

たべてみたいんだ。

あたみたいかもしれないけど、

ごめんね。

ぼうでわって、

みんなで、たべてみたいんだ。

おいしいスイカたべたいんだ。

だいすきなんだ、スイカさん。

入賞 「風のかぞく」

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校2年 深谷<sup>ふかや</sup> 然<sup>ぜん</sup>さん

日本間で、お絵かきしたら

風がビュンビュンふいてきた

おばあちゃんが

「これって台風の風かな？」

っていうから

風には兄弟があつてね

おとうさんが台風

お兄ちゃんが強い風

これは台風になるれんしゆうをしている

弟の風かなって思ったんだ

入賞 「ぼくは ミノ虫」

聖マリン学院小学校3年 森崎 一さん

さむい朝

ぼくは

なかなかふとんから脱出できない

「洗濯物干して来て。」

と、母にたのまれた姉が

ぼくが

寝ている部屋の窓を開けた

冷たい風がスツ―と入ってきた

ぼくは

あわててミノ虫になった

洗濯物を干している姉

なんだか逆さに見えた

物干し竿につかまってる

コウモリだ

姉が

小声でなにか言ってる

けれど ぼくには聞こえない

コウモリの姉を

ミノ虫のぼくが

笑って見てた。

入賞 「つばめ」

清泉小学校4年 齋藤 実桜さん

さいとう

みお

実桜さん

おーい

つばめよ

おまえは

五千キロのかなたからとんできた

雨の日も

風の日も

おまえは

負けずにとんできた

おまえは

敵に

自まんの長い尾を

ちぎられたこともある

生まれたばかりのひなを

うばわれたこともある

それでも

毎年かかさず帰ってくる

このつばめの強い本能は

変わることがないのだ

そして

今年もまた

この愛じょうをこめて作った巣の中で

太陽のように

目をキラキラさせて鳴いている

おまえの

かけがえのない小さな命のために

おまえは

とんできたのだ



# 入賞 「読書感想文」

鎌倉市玉縄小学校5年 鎌倉<sup>かまくら</sup>千夏<sup>ちなつ</sup>さん

ぐる ぐる ぐる

目が回りそう

思考 考え 文章

言葉の波におぼれちゃう

しゅわ しゅわ しゅわ

消えてしまいそう

ラムネの泡のように

想い 感情 キーワード

つかまえたと思っても

蟻のように逃げて行く

急いで見ても

つかまえられない

本当に読んだのかな あの本

何度も読み返す

まぼろしだったのかな

バサ バサ バサ

メモの山にうもれていく

チツ チツ チツ

時計の針だけが

まちがいなく進む

冷や汗 脈うつ心臓 心があはれる

ああ

夏休みが終わってしまふ

# 入賞 「バスケの音」

鎌倉市立大船小学校5年 池田 晃大いけだ あきひろさん

スパツ

ボールがネットをくぐる音

しつかり回転している

気持ちいい音

ダムダム ダムダム

ボールがはねる音

強いドリブル

大きい いい音

ビツ

手からボールがはなれる音

すばやいパス

感じる いい音

キュツ キュツ キュツ キュツ

バツシュと床がこすれる音

かたい守り

ひびく いい音

もつと もつと

いい音たくさん

出せるようになりたいな

入賞 「食べかけのニンジン」

沖繩カトリック小学校6年 比嘉門 未来さん  
ひがじょう 未来さん

『カメー、カメー』

わたしのおばあのおぐせ

いつも食べきれないぐらい

ごちそうをならべて

『カメー、カメー』

満足そうに

わたしを見つめていた おばあ

そんなおばあも九十二歳になった

耳が聞こえづらくなった

大好きだったユンタクも出来なくなった

わたしの顔も分からない日が多くなった

ある日

住みなれた家を

出ていった おばあ

静かに

前を向いていた おばあ

夏休み

おばあに会いに行った

もう昔みたいに

『カメー、カメー』と

もてなすごちそうもない

決められた夕食を

ただもくもくと食べていた おばあ

わたしの顔も分からない おばあ

その時だ

食べかけの ニンジン

わたしに差し出した

はしにさされた 食べかけのニンジン

『カメラ、カメラ』

そう言いたいんだね

「ありがとう」

いまでも おばあは おばあ

## 注

カメラ

沖縄方言で「食べなさい」という意味

おばあ

沖縄方言で「おばあちゃん」という意味

ユンタク

沖縄方言で楽しいおしゃべり 会話

中学生の部  
入賞

## 入賞 「生きる」

福岡教育大学附属久留米中学校1年 片小田 拓巳さん  
かたこだ たくみ

小川に小石を落とした

ドボンとまっすぐに水の中に吸い込まれた

今度は、斜めから振りかぶって投げた

ぴよん、ぴよん、ぴよんと、

水面を3回飛び跳ねた

最後はアンダー스로ーで、思い切り投げた

小石は大きな弧を描き、小さくなって、

はるか彼方に、ポンと飛んで行った

ドボンと落ちたら小さく水面に円を描く

ぴよんぴよん飛んだら、

リズムカルに3つの円となる

ポンと飛んだら

川いっぱい大きな円となる

僕は、どこまで飛べるのだろうか

僕はどんな軌跡を描けるのだろうか

僕はどんな図を残せるのだろうか

僕が、これからどんな力で

どんな思いを込めて

僕自身をどう走らせるか

僕の生きる証は、僕の責任で残し

僕にある決定権が選択していく

入賞 「我はソーメン」

国立音楽大学附属中学校1年 岸<sup>きし</sup> 明日翔<sup>あすか</sup>さん

今 我はプールにいる

大きなスライダーを滑る我

大きくふつといソーメンみたい

急カーブをぐるぐる回り

我は

クラクラ クーラクラ

もうすぐゴールと思いきや

目の前大きなお口あり

食べられるのか

食べられるのか

大きなお口に吸い込まれ

プールの胃袋へと入ってく

ぶえ

大きな口から出ていく我

今度はどんなふう<sup>ふう</sup>に滑ろうか



# 入賞 「僕」

東京学芸大学附属国際中等教育学校1年 長谷川 はせがわ 瑛大 あきひろ さん

だいたい四五四〇日

だいたい一〇八九六〇時間

だいたい六五三七六〇〇分

だいたい三九二二五六〇〇〇秒

これが僕

僕が生まれてからの時間

だいたい兄が嫌い

だいたい勉強よりアニメが好き

だいたいめんどくさがり

だいたい怖がり

これが僕

僕の悪い所

だいたい前向き

だいたいよく笑う

だいたい明るい

だいたい兄が好き

これが僕

僕の良い所

だいたいチビ

だいたいバカ

だいたいキチガイ

だいたいウザイ

これが僕

僕の兄からの評価

だいたい足が早くなりたい

だいたい感情をコントロールしたい  
だいたいもっと優しい人になりたい  
だいたい僕が僕でいたい

これが僕

僕がこれからしたいこと

だいたい三一九六〇日

だいたい七六七〇四〇時間

だいたい四六〇二二四〇〇分

だいたい二七六一三四四〇〇〇秒

きっと僕

僕がこれから生きる時間

僕がこれから楽しむ時間

# 入賞 「私」

湘南白百合学園中学校1年

渡邊 わたなべ

瑞紀さん みずき

にせものの自分は泣いていた  
ほんものの自分は楽しんでいた

にせものの自分はなやんでいた  
ほんものの自分はねぼけてた

にせものの自分は痛かった  
ほんものの自分はへっちゃらだった

にせものの自分はきたないと思った  
ほんものの自分はいいと思った

にせものの自分は怒っていた  
ほんものの自分はぼんやりしていた

にせものの自分はきどっていた  
ほんものの自分はめんどくさがっていた

にせものの自分は理解した  
ほんものの自分は分からなかった

にせものの自分は幸せだった  
ほんものの自分は足りなかった

ほんものも大事

にせものも大事

二人はときどき見えなくなる

その時 新しい私が出す

# 入賞 「みちびいて」

横浜国立大学教育学部附属横浜中学校2年 澁谷 耕大さん

八月の空に

給水塔のようなロケットがとびたつた  
私たちを

みちびいてくれるであろう箱を載せて

いま飛び立った箱は

餌にありついたミツバチのように

この地球をぐるぐると回って

例え私たちが間違った道を進んだとしても

正しい道にみちびいてくれるはず

この箱のセンパイも

地球をぐるぐると回っている

まるで毛糸玉のように

世の中のはるか上を回っている箱

これまでも

これからも

いつまでも

私たちを包むように…

私たちを包むようなもの

それは

私たちにとって大切なもの

みんな私たちを見守っている

世の中のはるか上を回っている箱

これまででも

これからでも

いつまでも

私たちを包むように…

みんな私たちを見守っている

## 入賞 「春の葬列」

星美学園中学校2年 鈴木<sup>すずき</sup>るりかさん

やわらかい草を踏む

革靴のにぶい光

墓地へと続く道は

細かった

無口な黒い集団

黒い背中その後には続く

空の輝き

小鳥のさえずり

境内の白木蓮

もう春なのだ

春を嫌いになりたくない

悲しい季節にしたくない

けれどこれから春が来るたびに

きっと思い出すのだろう

誰か「違う」と

言ってくればいいのに

こんなのは「嘘だ」と

今ひどく取り返しのつかないことが

起ころうとしている

そこへ納めてしまったら

もう終まいだ

けれどあっけなく

石の扉は閉じられた

日が暮れる

いつもと変わらない一日のように

人が一人

いなくなった世界で



入賞 「私の席は」

星美学園中学校2年 藤本 ゆやさん

右隣の席は佐藤さん

とても優秀

左隣の席は谷川さん

とても優秀

後ろの席はイムさん

とても優秀

右ななめ後ろの席は相川さん

とても優秀

左ななめ後ろの席は田中さん

とても優秀

前の席は先生

とてもおこりんぼう

怒らせているのはいつも私だけけれど

てへっ!!

## 入賞 「ヒーローの持ち物」

加藤学園暁秀中学校2年 ほるにゃつく 乃莉子<sup>のりこ</sup>さん

目の前にある山積みの課題

無造作に置かれた紙の束

本当は全部無いはずだった

何を考えているか分からなくなった日

本当は全部分かってあげるはずだった

怖気付いて目をそらした瞬間

本当は向き合っているはずだった

自分の身を守るためだけにした無視

本当は人を睨む事くらいできていた

本当は自分を犠牲にする

ヒーローになるはずだった

瀬戸際には立っている

差し伸ばす手も持っている

してあげることも分かっている

舞台はもう整っていた

ヒーローはあと、何をもっている

後、何が必要だ

「踏み出せ！頑張れ！」

## 入賞「夜」

女子学院中学校3年 奥田 由珠香さん

おくだ

ゆみか  
さん

チューリップが口をつぐむと

黒猫がにやあんと一鳴

家々は目を閉じて

懐かしい風にはっと一息

昼の光は一時の夢

街は黒に心を癒す

取り残された人いきれは

行き場をなくして星を見上げる

私は窓から身をのりだして

縋るように手を伸ばす

再びつかめるはずなどない

忘れられない

あの日の夜に

ああ、

私はどうして

ここから

飛び出せないのでしょうか！

夜風が頬を撫でると

物悲しさにほろりひと泣き

月はにっこりとして

静かな夜にふっとひと笑み

# 入賞 「ワンダフル色えんぴつ」

福岡教育大学附属久留米中学校3年 溝上 由芽さん

規則正しく並ぶ

色えんぴつ

私の頭も

こんな風に整理されてたらしいのに

様々な色を持つ

色えんぴつ

私の発想も

こんな風に色とりどりだったらしいのに

補い合って絵を完成させる

色えんぴつ

私の心胸も

こんな風に上手く伝えられたらしいのに

ワンダフルな

色えんぴつ

うらやましい

私の人生も

たった一度の

ワンダフルなものに

発行日 平成29年11月5日

編集・発行 鎌倉文学館指定管理者

鎌倉市芸術文化振興財団・

国際ビルサービス共同事業体

鎌倉文学館

鎌倉市長谷 1・5・3